20　email t-hatsu@tokyo-np.co.jp

T発

「5×緑」生育中

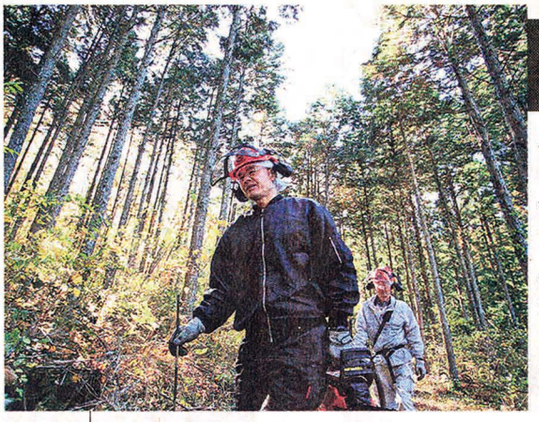
山は再生 街に潤い

広尾や代官山に「里山の緑」が広がっている。都心に在来種の草木を届けることで、里山の再生にもつなげる。そんな一石二鳥のプロジェクトが進行中なのだ。「5×緑（ゴバイミドリ）」と呼ばれる独自の植栽が核になっている。

千代田区三番町から渋谷区広尾に移転し、この秋、新たにオープンする山種美術館。真新しい建物のあちこちで生い茂る緑が、日本画専門の美術館らしい落ち着きのあるたたずまいを演出している。

コナラ、クヌギ、チゴユリ、ヤマブキ…。入り口脇や、各階のテラスには、古来、日本画にも描かれてきたような在来種の草木であふれたかごが並ぶ。一見すると、長い生け垣のようだ。

かごの基本の形は立方体。上面だけでなく、四つの側面も草で覆われる。開発した都市計画コンサルタント会社「アネックス」（渋谷区）の担当者は「側面も活用することで緑の面積を五倍にするという発想が5×緑の名前の由来」と説明する。

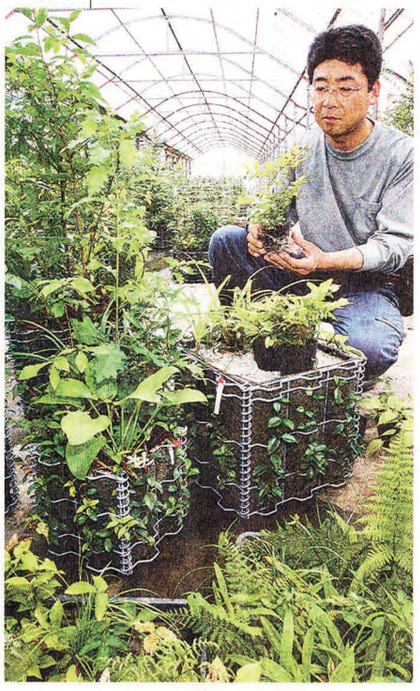


◀山種美術館の入り口脇ではテイカカズラの花が咲いていた＝渋谷区広尾で

かごに草木を植え付け、出荷しているのは、茨城県つくばみらい市の苗木業者「矢澤ナーセリー」。5×緑の事業が始まった六年前から、アネックスと提携している。

代表の矢澤光一さん(四七)は「使っている草木は関東地方の在来種だけ」と語るが、当初野草を集めるのは困難だった。「地元の里山を回ったが生えているのは繁殖力の強い外来種ばかり」と嘆く。しかし二年前から、純粋な野草が手に入るようになった。大学時代の友人で、栃木県那珂川町で農林業を営む佐藤昭二さん(四八)の協力が得られたためだ。

佐藤さんは、代々所有している里山に入り、スコップで野草を採取して矢澤ナーセリーに出荷する。「かつては荒れ放題だった」という山林の間伐や下草刈りなどを続け、少しずつ野草が育つようになった。



「かご5面草木」施設、住宅にも人気

作業はボランティアではない。アネックスから、草木の生育管理費も受け取っている。佐藤さんは「収入なしで、山の手入れするほどの余裕はない。豊かな自然を取り戻しつつあるのも、支援があってこそ」と言う。

かつて日本各地の里山は、近くの農家などが管理していた。木がまきや炭などの燃料に、草が家畜の飼料に使われていたからだ。今では、人の手が入ることはめったになく、荒廃が進む一方だ。

里山の利用価値を見直す5×緑事業。癒やしの空間は、代官山ヒルサイドテラスのカフェや大学、個人宅にまで広がっている。より多くの里山を守るため、基金の創設も計画中だ。

文・鬼木洋一／写真・市川和宏、中西祥子／紙面構成・佐藤賢一

(上)草刈りのため里山を歩く佐藤昭二さん(奥)ら＝栃木県那珂川町で(アネックス提供)　(下)野草をかごに植える矢澤光一さん＝茨城県つくばみらい市で